

2017年3月期決算概要と業績予想

テルモ株式会社
常務執行役員 IR・広報室担当
北畠 一明

2017年5月10日

2017年3月期（2016年度）決算概要と業績予想についてご説明します。

為替の影響を除き増収増益、純利益は過去最高を達成

(億円)

	15年度	16年度	増減率	為替除く 増減率
売上高	5,250	5,142	-2%	+6%
粗利益	2,829 (53.9%)※	2,780 (54.1%)※	-2%	+8%
一般管理費	1,681 (32.0%)	1,677 (32.6%)	-0%	+9%
研究開発費	331 (6.3%)	337 (6.6%)	+2%	+8%
営業利益	817 (15.6%)	766 (14.9%)	-6%	+7%
(のれん等償却除く)	1,019 (19.4%)	973 (18.9%)	-5%	+8%
経常利益	731 (13.9%)	686 (13.3%)	-6%	
純利益	507 (9.7%)	542 (10.5%)	+7%	

期中平均レート	USD	120円	108円
	EUR	133円	119円

- 売上高 : 心臓血管の海外が引き続き、二桁伸長し全体を牽引
- 営業利益 : カテーテル高収益品の拡大、基盤医療器の物量増、品質システム改善コスト減で粗利率改善
- 経常利益 : 為替差損は前年比縮小(15年度:75億→16年度:41億)
- 純利益 : 仏ベンチャーとの共同開発解消による特損計上、オリンパス社株式の売却益



※一部生産子会社の一般管理費を売上原価へ組み替え(20億円)

2/30

2016年度の決算の総括です。為替の影響を除いて増収増益、純利益は過去最高を達成しました。

売上高は前年度比- 2 %、営業利益が- 6 %、為替の影響を除くとそれぞれ+6%、+7%となりました。純利益は、オリンパス社の株式売却益もあり、過去最高であった昨年をさらに7%上回りました。

16年度業績予想比 主な変動要因

(億円)	2月9日付 業績予想	実績	増減		(億円)
				<営業利益>	
売上高	5,100	5,142	+42	■ アクセス・ニューロ事業の売上上振れ	+20
営業利益 (率)	710 (13.9%)	766 (14.9%)	+56	■ 買収事業の売上順調	+10
				■ 一般管理費の支出ズレ等 (心臓血管)	+10
				■ R&D : 治験時期ズレ、共同開発先からの開発費入金	+15
経常利益	620	686	+66	<経常利益>	
				■ 為替差損益・調達一時コスト時期ズレ	+10
純利益	475	542	+67	<純利益>	
				■ オリンパス社株式売却益他	+15

USD 107円 USD 108円
EUR 118円 EUR 119円



3/30

第3四半期の決算発表時に業績予想を下方修正しましたが、実績はこの予想を大きく上回りました。その主な要因を説明いたします。

売上高は、第4四半期が特に好調で、四半期としては過去最高の1,398億円となりました。特にアクセス・ニューロ事業の売上高が上振れるとともに、1月に買収を完了した止血デバイス事業の売上が、想定よりも順調に推移しました。

営業利益は、予想に対し、アクセス・ニューロ事業の売上高の上振れで+20億円、買収した止血デバイス事業の売上が想定よりも順調に推移し+10億円となりました。さらに、販売が好調に推移したこともあり、想定よりも一般管理費を使わなかったことで+10億円、R&Dも第4四半期は第3四半期よりも増えましたが、想定していた程は増えなかったことで+15億円、合計で+56億円の売上上振れとなりました。

経常利益は、営業利益での上振れ分に加えて、想定よりも為替差損が減少するとともに、資金調達に係る費用の支出時期がズレたことで+10億円、合計で+66億円の売上上振れとなりました。

純利益は、経常利益での上振れ分に加えて、オリンパス社の株式売却益が想定よりも大きかったことなどにより+15億円、合計で+67億円の売上上振れとなりました。

営業外・特損益・法人税

(億円)

	15年度	16年度	
営業利益	817	766	増減率 -6%
営業外損益	-86	-80	為替 15年度 上期 下期 累計 15年度 -24 -51 -75 16年度 -66 +25 -41
経常利益	731	686	増減率 -6%
特別損益	+38	+64	15年度 幡ヶ谷土地売却 +44 16年度 ART社共同開発解消 -70 保有株式売却益 +157
税前利益	769	750	増減率 -3%
法人税等合計	-262 34%	-208 28%	過去評価減したオリンパス社株式の 税効果の実現
純利益	507	542	増減率 +7%

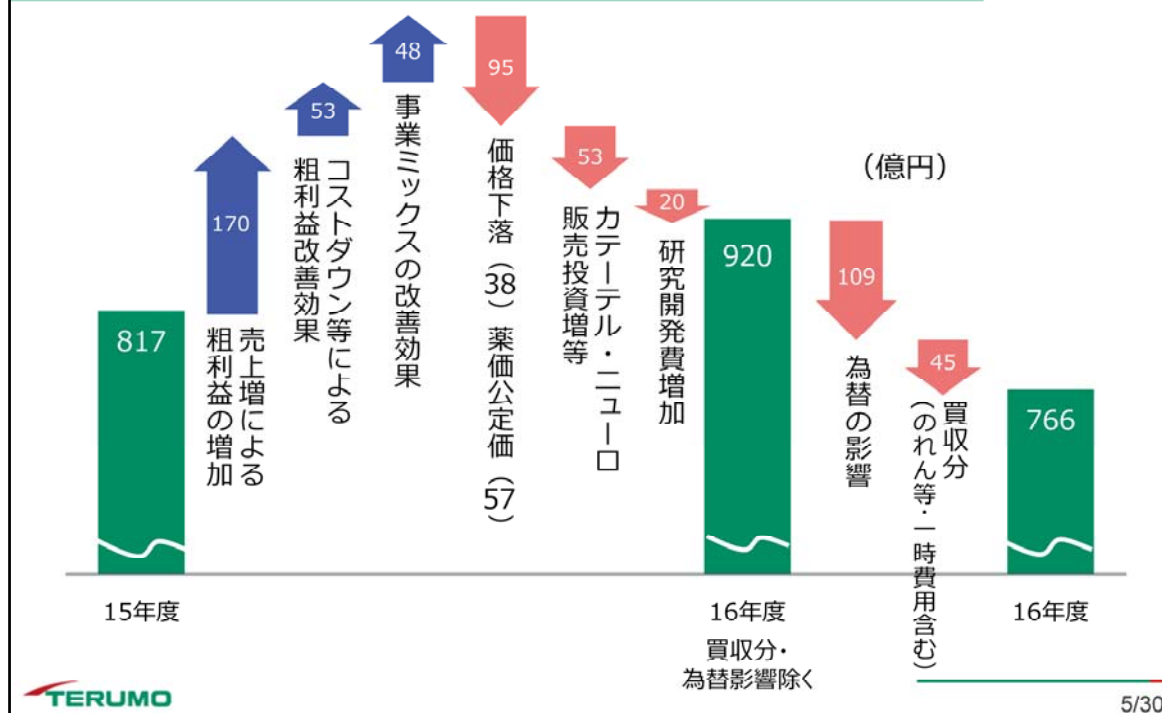
 TERUMO

4/30

営業外損益、特別損益、法人税等に関しては、第3四半期までの状況とあまり変化はありません。

為替差損益は、上期以降円安が進み、上期の為替差損を下期の差益で一部吸収しました。特別損益は、第4四半期にオリンパス社の株式売却による売却益を計上しました。

営業利益増減分析



営業利益の増減分析です。

プラス要因を合計すると、概ね期初の想定に近い水準となりました。

マイナス要因は、薬価公定価の改定による影響額はほぼ想定通りでしたが、価格の下落は想定より少なく済みました。主な要因は3点あります。第一に、ホスピタルカンパニーでは、中南米やアジアの一部で不採算事業から撤退の際、大幅な値上げを実施しましたが、想定した程は売上が落ちませんでした。第二に、心臓血管カンパニーで、主に欧州や中東でより価格の高い国での販売を増やす取り組みを進めました。第三に、TIS事業の売上が好調に推移したこともあり、当初の想定よりも価格を下げずに済みました。

カテーテル・ニューロ等の販売投資増は、期初の想定を下回りました。販売費及び一般管理費の内訳を見ると、前年度比で為替の影響を除くと人件費は増えましたが、販促費は減少しました。売上が好調で販促費を想定よりも使わずに済んだことや、Misagoのリコール等が主な要因です。また、心臓血管カンパニーにおける3件の買収に伴い、買収の準備や統合作業にリソースを注力したことも要因です。

これらの結果、買収分および為替影響を除く営業利益は920億円、前年度比13%増となりました。

16年度為替の営業利益への影響

通貨別	15年度 レート (円)	期初想定		16年度実績	
		レート (円)	対前年度・影響額 (億円)	レート (円)	対前年度・影響額 (億円)
USD	120	110	19	108	27
EUR	133	125	-23	119	-52
人民元	19	17	-15	16	-23
その他 (アジア・中南米等)			-66		-61
合計			-85		-109



6/30

2016年度通期の為替レートは、期初の想定レートに比べてやや円高となりました。ドルの変動によるプラスの影響額が増える一方、ユーロと人民元ではマイナスの影響額が大きくなりました。その他の通貨では、総じて対ドル高となりましたが、円も対ドルで高くなったため、結果として、期初想定していた変動額と比べてあまり差異はありませんでした。その結果、影響額の合計は、期初想定が前年度比-85億円でしたが、実績では-109億円となりました。

17年度 為替感応度

(億円)

	USD		EUR	人民元
	のれん等償却 除く	のれん等償却 含む		
売上高	16	16	8	18
営業利益	0	-2	5	9

<参考> 10%変動時のインパクト

	北米	中南米	欧州		アジア	
			ユーロ圏	その他	人民元	その他
営業利益	-18	8	56	10	14	33



7/30

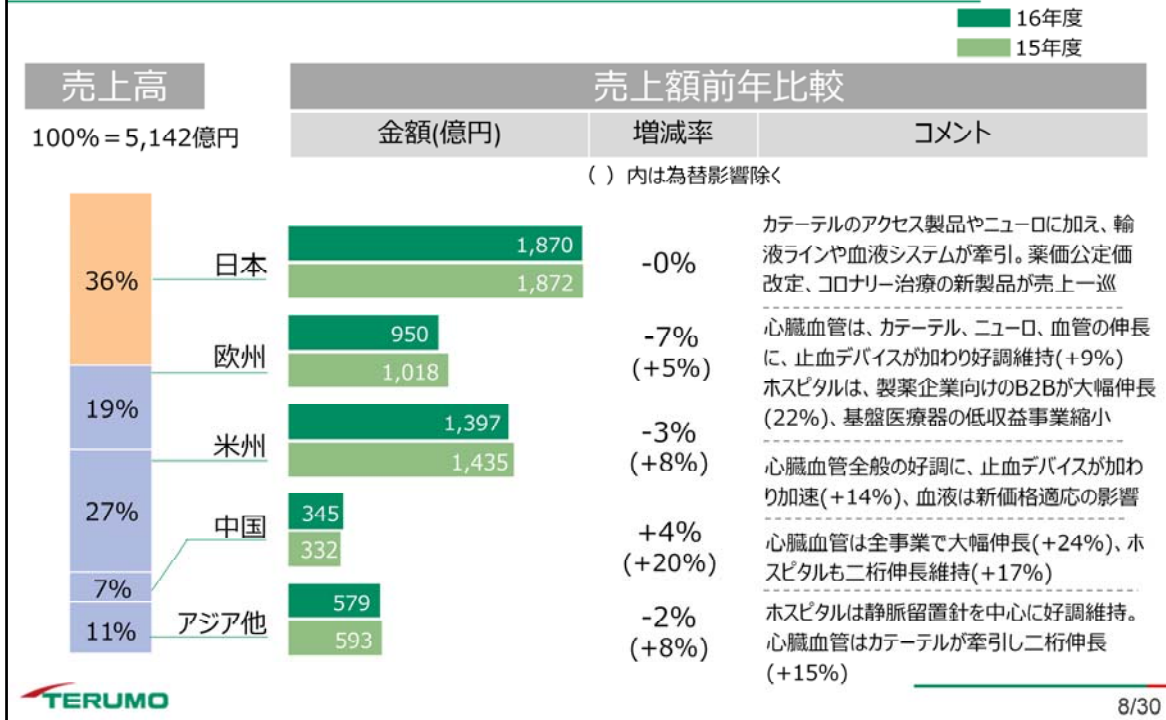
2017年度の為替感応度は、従来の内容から3点見直しました。

第一にユーロに関して、買収も含めて売上高が増える一方で、ホスピタルカンパニーでの生産移管等で費用が減っているため、営業利益の感応度を3億円から、5億円に見直しました。

第二に、人民元の売上高が増えてきたため、新たに追加しました。

第三に、ご参考として、各地域の通貨が10%変動した場合の影響額を記載しています。

地域別売上高

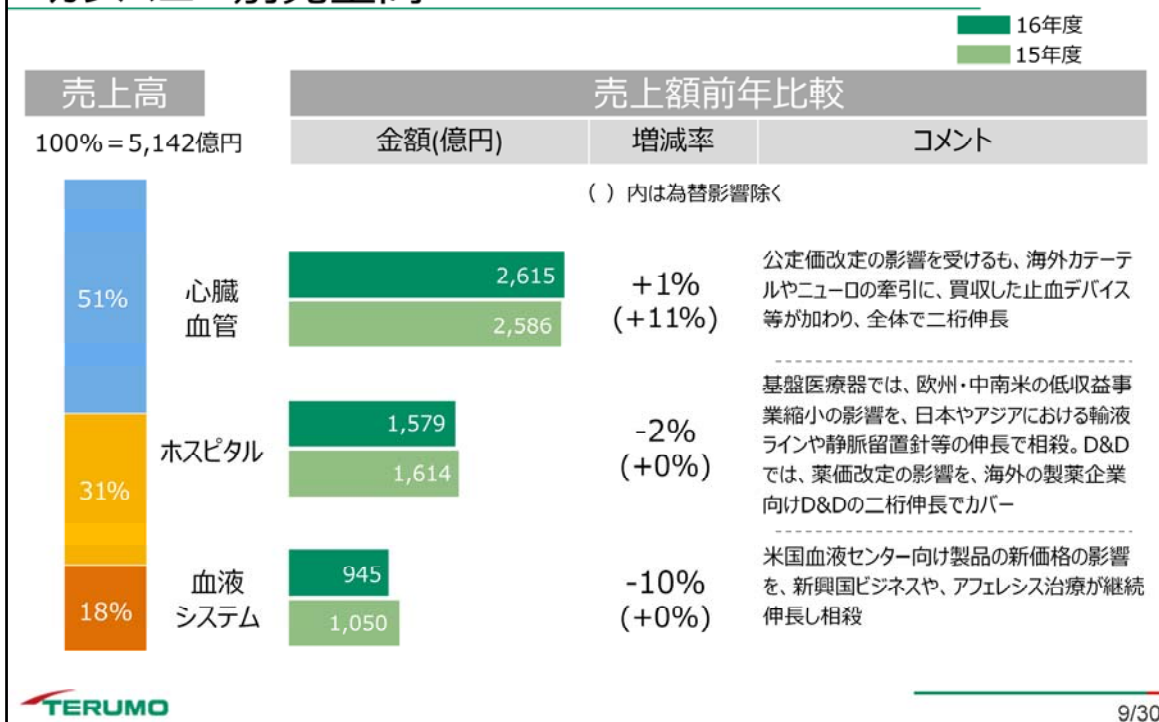


地域別の売上高は、第3四半期までの状況とほぼ変わりはありません。

日本は第3四半期累計では減収でしたが、第4四半期が好調に推移し、通期ではほぼ前年並みの水準となりました。

海外は為替の影響を除くと全地域で増収となりました。中国は特に好調で、為替によるマイナスの影響を吸収し、増収となりました。

カンパニー別売上高



カンパニー別の売上高も第3四半期までの状況とほぼ同じです。為替の影響を除くと、心臓血管カンパニーの売上高は二桁伸長、ホスピタルカンパニー、血液システムカンパニーはほぼ前期並みとなりました。

心臓血管：売上・利益ともに二桁伸長を達成

						(億円)
		15年度	16年度	増減率	主なトピック	金額
売上高		2,586	2,615			
					()内は為替影響除く	
				+1% (+11%)	為替のマイナス影響	-255
					日本：公定価改定のマイナス影響、 コロナリー治療の新製品が売上一巡 ニューロは二桁伸長(+16%)	-6
					海外：全事業でプラス伸長 カテーテル・ニューロは二桁伸長(+16%)	+227
				買収による増加	+63	
事業利益 (率)		634 (25%)	650 (25%)	+3% (+22%)	アクセスデバイスやコロナリー治療デバイスなど 高収益なカテーテル製品が牽引	
					ミサゴのリコールの影響(-20)	

第3四半期までの状況と変わりはありません。買収による売上増は63億円となりました。

ホスピタル: 収益性改善が着実に進む

					(億円)
	15年度	16年度	増減率	主なトピック	金額
				()内は為替影響除く	
売上高	1,614	1,579	-2% (+0%)	為替のマイナス影響	-40
				日本: 輸液ライン中心に基盤医療器が伸長	+12
				造影剤代理販売終了	-13
				海外: 欧州・中南米で低収益事業を縮小	-15
				中国・アジアで静脈留置針等が牽引	+11
事業利益(率)	226 (14%)	238 (15%)	+5% (+7%)	金利低下による年金コスト増のマイナス影響 基盤医療器を中心とした継続的なコスト改善 15年度: 13.9% ⇒ 16年度: 15.0%	

着実に収益改善が進んでいます。前年度比で増益、事業利益率も改善しました。

血液システム：米国新価格の影響一巡

					(億円)
	15年度	16年度	増減率	主なトピック	金額
()内は為替影響除く					
売上高	1,050	945	-10% (+0%)	為替のマイナス影響	-106
				米・血液センター向けの新価格適用	- 20
				中東・ロシアのマクロ経済の影響	- 6
				アフレス治療が伸長	+ 18
				新興国・血液センタービジネスの継続伸長	+ 12
事業利益(率)	169 (16%)	136 (14%)	-20% (-6%)	血液センター向けの新価格適用による粗利減に加え、ベトナム工場の立ち上げ費用やR&D投資増	
				為替影響で大幅減益だが、それを除けば計画レベル達成	

為替の影響、米国の新価格適用等により減収減益となりましたが、為替の影響を除けば事業利益は計画レベルを達成しました。2017年度以降は業績改善を見込んでいます。

16年度 主なトピックス

- 国際会計基準（IFRS）の適用を発表（11月）

全社

- 5カ年の中長期成長戦略を発表（12月）
- 442億円の自己株買い（2月）
- 3年連続の「健康経営銘柄」に選定（2月）

- 国内初のスプレー式癒着防止材「アドスプレー」の承認取得（6月）
- TCVS社、米FDAによる販売制限が全面解除（6月）

事業

- 買収を通じて心臓血管のポートフォリオを強化
 - 新・脳動脈瘤塞栓デバイスの米Sequent Medical社（6月）
 - St. Jude社・Abbott社の止血デバイス事業等（12月）
 - 胸部・腹部ステントグラフトの米Bolton Medical社（1月）



13/30

2016年度の主なトピックスはスライドにお示した通りです。

16年度パイプライン製品のローンチ状況

領域	製品	地域	ローンチ	領域	製品	地域	ローンチ
心臓	DES (Ultimaster)	◎ ★ 仏	済み	CV	遠心ポンプ装置	亜	済み
	DES (Ultimaster) 4.0mm品種追加	◎ ★ 日	済み	再生	ハートシート	★ 日	済み
イメージング	IVUS	◎ ★ 日	済み	D&D	皮内投与デバイス	★ 日	17年度予定
ペリフェラル	PTAバルーン (膝下, RX/OTW)	日・米・欧	日米済み		癒着防止材	★ 日	済み
	PTAバルーン (膝上・下両用, RX/OTW)	日・米・欧	日米済み	DM	血糖計 (フィットスマイル)	中	17年度予定
	PTAバルーン (膝上, RX/OTW)	日・米・欧	済み	血液	自動製剤化システム	★ 日	済み
脳	プロテクションデバイス	欧	17年度予定	  			
オンコロジー	放射線塞栓剤 (Quirem)	★ 欧	17年度予定	DES 「Ultimaster」 日本・フランス 癒着防止材 「AdSpray」 日本 血管内超音波診断システム 「AltaView」 日本			

◎ 業績貢献 大、★ イノベーション度 高



14/30

2016年度のパイプライン製品は、ほぼ予定通り順調にローンチすることが出来ました。一部の製品は2017年度にシフトしましたが、計画に対し概ね数カ月程度のズレです。

17年度業績予想

	(億円)			参考
	16年度 実績	17年度 業績予想	増減率	IFRS基準 17年度 業績予想
売上高	5,142	5,750	+12%	5,750
営業利益 (率)	766 (14.9%)	820 (14.3%)	+7%	950 (16.5%)
経常利益	686	795	+16%	
純利益	542	530	-2%	680
為替レート	USD 108円	110円		
	EUR 119円	120円		

17年度業績予想の買収分についてはPPA未了につき暫定値



15/30

2017年度は、通期決算でIFRSを適用しますが、第1から第3四半期までは日本基準で決算を発表します。したがって、今回お示しする内容は主に日本基準での予想値です。2017年度の売上高は前年度比12%増の5,750億円、営業利益は7%増の820億円、共に過去最高の水準です。

ご参考として、IFRSを適用した場合の業績予想もお示ししています。ただし、買収した事業のPPAが完了していませんので暫定値です。売上高は日本基準と変わりませんが、営業利益、純利益は、買収に関わるのれんの償却費が無くなるため、営業利益は950億円、純利益は680億円と、日本基準よりも大きくなる見込みです。

17年度業績予想 (買収分・為替影響除く)

(億円)

	16年度 実績 買収分除く	17年度 業績予想 買収分・為替影響除く	増減率	為替 の影響	買収分	17年度 業績予想
売上高	5,078	5,365	+6%	+60	+325	5,750
営業利益 (率)	811 (16.0%)	875 (16.3%)	+8%	+15	-70	820 (14.3%)
経常利益	732	855	+17%	+15	-75	795
純利益	587	565	-4%	+10	-45	530

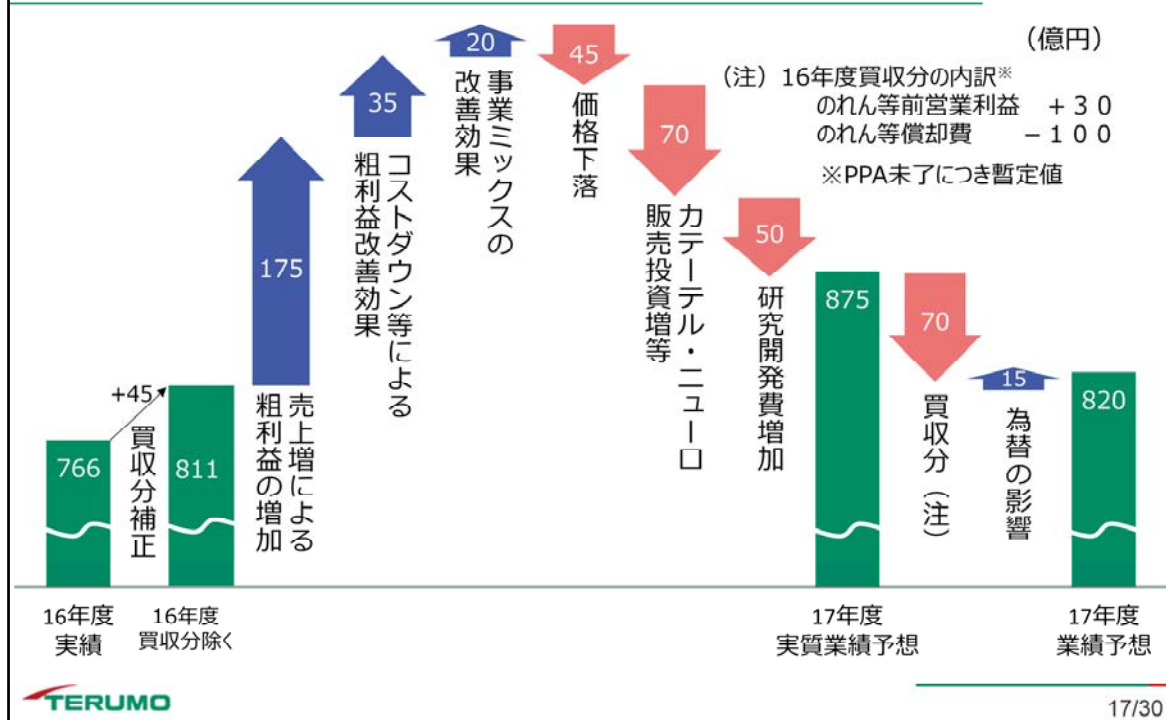
為替レート	USD	108円	108円	110円
	EUR	119円	119円	120円



16/30

買収分、為替の影響を除いた2017年度の業績予想を示しています。売上高は6%増、営業利益は8%増となります。中長期成長戦略の目標である「市場の成長を上回る売上成長」と、「売上成長を上回る利益成長」の達成に向けて、順調なスタートとなる見込みです。

17年度業績予想 (増減要因)




2017年度の営業利益予想の前年度比増減要因です。買収分を除くと、2016年度は811億円、2017年度は875億円の見込みです。これに買収分と為替の影響を加えると820億円となります。なお、PPAが未了のため暫定値ですが、買収分ののれん等償却費は約100億円の見込みです。2016年度に買収した企業・事業の内、止血デバイスのアンジオシールは黒字ですが、カリラ・メディカル、シークエントメディカル、ボルトンの3社はいずれもまだ開発費負担が多く、赤字です。これらの買収分を合算すると、のれん等償却前営業利益は30億円のプラスとなる見込みです。この3社の損益は、2017年度を底に改善を見込んでいます。

17年度業績予想：3カンパニーで増収増益

	売上※		事業利益※		コメント
	金額（億円）	増減率	金額（億円）	増減率	
心臓 血管	17年度	3,080	23%	720	カテーテルのみならず全事業 による売上・利益貢献へ
	16年度	2,615	+18%	25%	
ホスピタル		1,605	15%	245	着実な成長 収益の改善を継続
		1,579	+2%	15%	
血液 システム		1,005	14%	145	成長軌道への回帰 新興国、アフレスシス治療等 が伸長
		945	+6%	14%	

※ 為替影響除く、買収分含む



18/30

為替の影響を除いたカンパニー別の業績予想です。買収分は含めています。

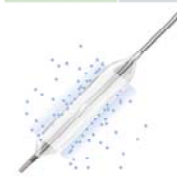
心臓血管カンパニーの売上高、事業利益は、買収分を除いても共に8%程度の伸びを見込んでいます。

17年度パイプライン製品

領域	製品		地域
心臓	PTCAバルーン		米
ペリフェラル	ステント(TRI)	★	日・米・欧
	PTAバルーン(TRI)	★	日・米・欧
	PTAガイドングシース(TRI)	★	日・米・欧
	薬剤塗布バルーン	◎ ★	欧
	塞栓コイル	◎	欧
脳	プロテクションデバイス		欧
	ハイドロコイル3D		日・米・欧
オンコロジー	放射線塞栓柱ビーズ	★	欧

◎ 業績貢献 大、★ イノベーション度 高

領域	製品		地域
CV	人工心肺装置(再出荷)	◎	グローバル
	次期・人工肺	◎	グローバル
医療器	縦型・輸液ポンプ		日
	抗がん剤暴露防止システム		日
DM	パッチ型・インスリンポンプ	★	日
血液	次期・成分採血装置ソフトウェア		グローバル



薬剤塗布バルーン
「Kanshas」 欧



人工心肺装置
再ローンチ グローバル



パッチ型
インスリンポンプ 日



2017年度のパイプライン製品です。

以上で説明を終わります。ご清聴ありがとうございました。

参考資料

16年度 事業別・地域別売上高と伸長率

(億円)

事業 セグメント	日本	海外					合計
		計	欧州	米州	中国	アジア	
心臓血管	510 (-1%)	2,106(+14%)	647 (+9%)	920(+14%)	282 (+24%)	256 (+15%)	2,615(+11%)
うちカテーテル※	388 (-2%)	1,701(+16%)	531(+11%)	691(+17%)	268 (+23%)	212 (+19%)	2,089(+13%)
ホスピタル	1,238 (-0%)	341 (+2%)	78 (-7%)	78 (+5%)	19 (+17%)	166 (+5%)	1,579 (+0%)
血液システム	120(+5%)	825 (-1%)	224 (-1%)	399 (-2%)	44 (+4%)	158 (+2%)	945 (+0%)
合計	1,870 (-0%)	3,272 (+9%)	950 (+5%)	1,397 (+8%)	345 (+20%)	579 (+8%)	5,142 (+6%)

※ニューロバスキュラー事業含む
 () 内は為替影響除く前年比伸長率



販管費

(億円)

	15年度	16年度	増減	増減率	為替除く 増減率
人件費	751	746	- 5	- 1%	+8%
販促費	172	156	-16	- 9%	- 2%
物流費	110	112	+ 2	+2%	+6%
償却費	274	275	+ 1	+0%	+10%
その他	374	388	+14	+4%	+11%
一般管理費計	1,681 (32.0%)	1,677 (32.6%)	-4	-0%	+9%
研究開発費	331 (6.3%)	337 (6.6%)	+ 6	+2%	+8%
販管費合計	2,012 (38.3%)	2,014 (39.2%)	+ 2	+0%	+8%

四半期の動き

(億円)

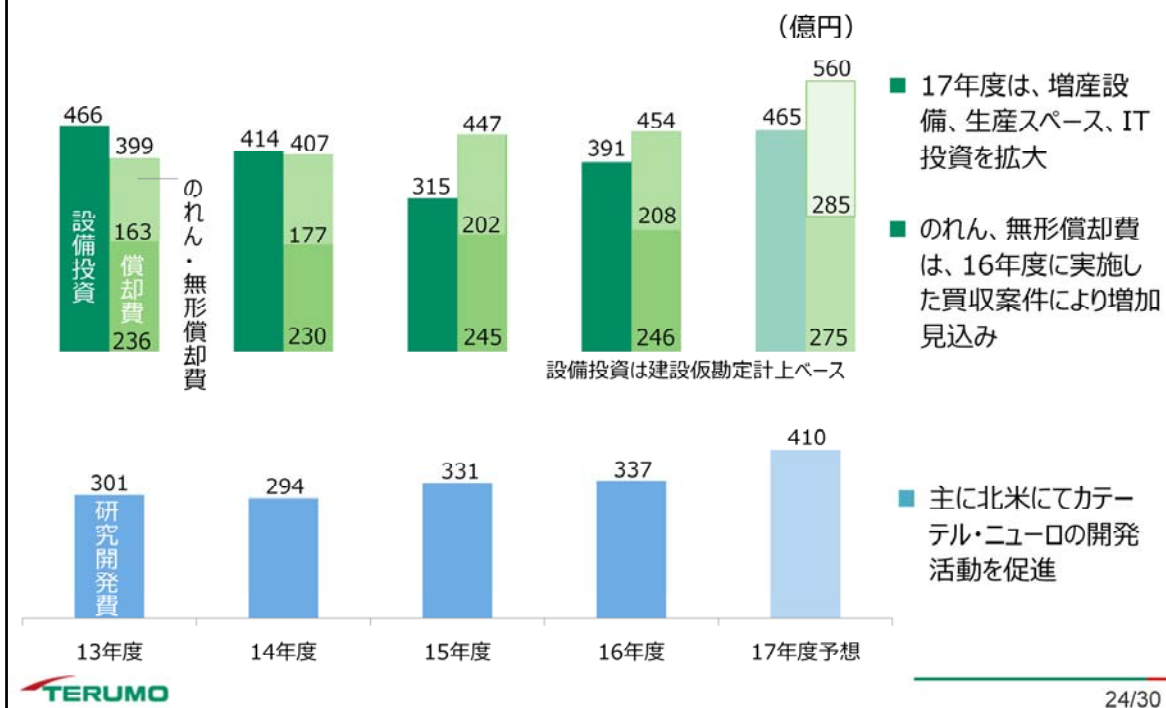
	15年度Q4 (1-3月)	16年度Q1 (4-6月)	Q2 (7-9月)	Q3 (10-12月)	Q4 (1-3月)
売上高	1,290	1,245	1,206	1,293	1,398
粗利益	697 (54.0%)	692 (55.6%)	658 (54.6%)	687 (53.2%)	743 (53.2%)
販管費	422 (32.7%)	397 (31.9%)	396 (32.9%)	410 (31.7%)	474 (34.0%)
開発費	99 (7.7%)	81 (6.5%)	82 (6.8%)	82 (6.4%)	92 (6.6%)
営業利益	176 (13.6%)	214 (17.2%)	180 (14.9%)	195 (15.1%)	177 (12.6%)
のれん等償却 除く営業利益	225 (17.4%)	259 (20.8%)	226 (18.8%)	245 (19.0%)	242 (17.4%)
四半期 平均レート	USD 115円	108円	102円	109円	114円
	EUR 127円	122円	114円	118円	121円

※一部生産子会社の一般管理費を売上原価へ組み替え

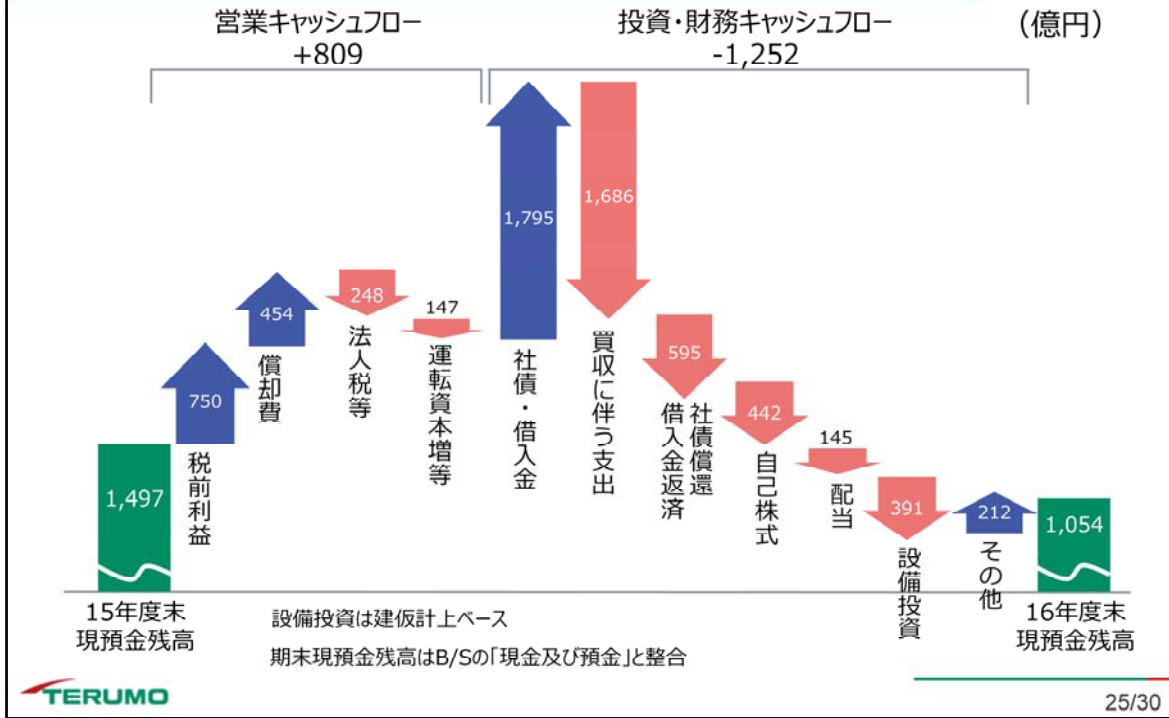


23/30

設備投資と研究開発費



キャッシュフロー



買収資金を自己資金と低利負債で調達

- 財務健全性を考慮しつつ低利の金融環境を活用
- マイナス金利政策導入以降実施した買収資金調達

➤ 2017年1月	シンジケートローン(*)	300億円
➤ 2017年4月	シンジケートローン(*)	1,200億円
➤ 2017年4月	普通社債	200億円

- ✓ 借入期間3年~10年（平均約7年）

(*)融資の一部に株式会社国際協力銀行の海外展開支援融資ファンリティを活用

- 有利子負債増加も支払利息は減少
 - 15年度 14億円 → 16年度 12億円 → 17年度10億円程度へ

17年度業績予想：会計基準変更の影響

- 2017年度 期末決算からIFRS（国際会計基準）を適用
- 開示スケジュール 2017年度第1～3四半期：日本基準
2017年度期末決算短信から：IFRS

(億円)	参考		影響
	日本基準	IFRS	
売上高	5,750	5,750	-
営業利益 (率)	820 (14.3%)	950 (16.5%)	+130
調整後営業利益 (率)	1,105 (19.2%)	1,100 (19.1%)	-5
純利益	530	680	+150

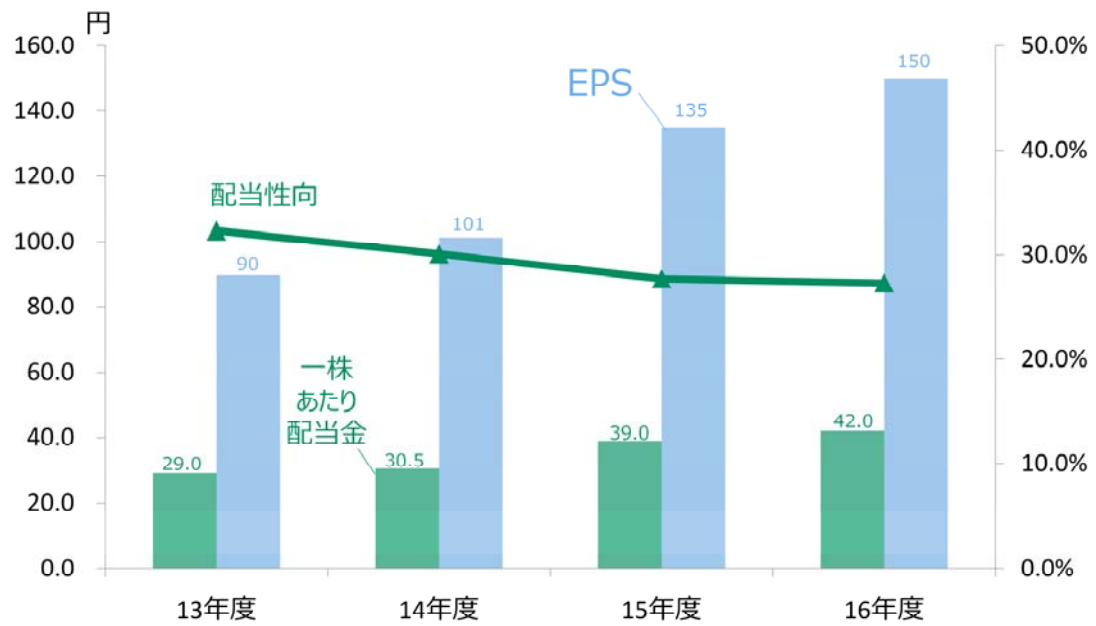
■ 主な影響額について

- のれんの非償却
- 営業外損益→営業利益への組替等

■ 調整後営業利益

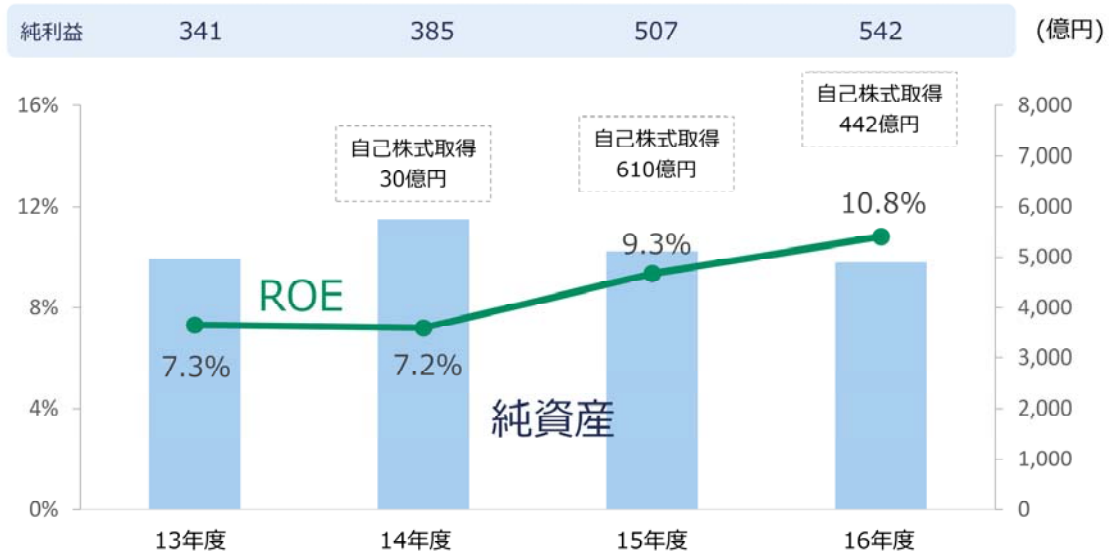
IFRSベースの営業利益から、買収等に係る費用および無形資産償却や一時的費用を排除した定常ビジネスベースの営業利益（≒従来の「のれん等償却前営業利益」）

配当およびEPSの推移



ROE推移

■ 10%台を達成



おことわり

テルモの開示資料に記載されている業績見通し等の将来に関する記述は、当社が現在入手している情報及び合理的であると判断する一定の前提に基づいており、当社としてその実現を約束する趣旨のものではありません。様々な要因により、実際の業績等が変動する可能性があることをご承知おきください。実際の業績に影響を与えうる重要な要素には、テルモの事業領域を取り巻く経済情勢、為替レートの変動、競争状況などがあります。